



第29号
2024.3

青少年赤十字

賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団
事務局 日本赤十字社広島県支部

〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
TEL (082) 545-5011

青少年赤十字の活躍に寄せて 広島県教育委員会教育長 平川 理恵



日本赤十字社におかれましては、全国の赤十字病院を中心として、様々な疾病の治療や感染症の拡大防止のための活動等に取り組み、社会活動を支えていただいていることに、心から敬意と感謝の意を表します。また、令和6年1月1日に発生した能登半島地震に際して、職員・ボランティアの派遣や救援物資の配布等を通して被災地の支援に当たってこられたことに對して、深く敬意を表します。

さて、青少年赤十字におかれましては、児童生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することを目的として様々な活動を展開されてきました。長年にわたり児童生徒の成長を支えてこられたことに、改めて感謝を申し上げます。

活動のひとつとして取り組んでおられる防災教育では、未来を担う子供たちが、自然災害の正しい知識をもち、自ら考え、判断し、危険から身を守る行動をとることができるよう、青少年赤十字防災教育プログラムを作成されております。このプログラムは、青少年赤十字で掲げている「気づき、考え、実行する」という態度目標に基づき、児童生徒が主体

的に取り組む中で、知識と行動力を身に付けることができるものになっており、学習指導要領で示されている「災害等乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」の育成に寄与するものと考えております。

県教育委員会におきましては、「広島で学んで良かったと思える 広島で学んでみたいと思われる 日本一の教育の実現」を目指し、学んだ知識を活用して、他の人と協働して課題を解決する力を育むことを重視した「主体的な学び」を促す教育活動の充実に取り組んでいます。

これは、青少年赤十字加盟校の児童生徒が、ボランティア活動や国際交流などに取り組む中で、課題に「気づき」、課題解決の道筋を主体的に「考え」、仲間と協力して一歩ずつ「実行する」とことと軌を一にするものと考えます。今後も、「気づき、考え、実行する」力を自分たちの生活の中でも生かしながら、周りの人たちと共に生きることが出来る青少年の育成に取り組んでいただきたいと思います。最後になりますが、青少年赤十字の更なる発展と加盟校の広がりに向け、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。



青少年赤十字により繋がる縁 日本赤十字社広島県支部事務局長

坂井 浩明



賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご

理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

昨年、2023年は、世界的に多くの危機に直面した1年でした。

国内では、大雨や台風による災害が発生しました。また、国外では、トルコ・シリア地震などの自然災害、武力衝突や紛争によるウクライナ人道危機及びイスラエル・ガザ人道危機などにより多くの方々が死傷し、国内外への避難を余儀なくされるなど、甚大な被害をもたらしており、現在なお終息の目途が見えておりません。

このような国内外における人道的危機に対して、日本赤十字社は人道・中立・公平という赤十字の基本原則のもと人道援助を必要としている人びとに支援を届け続けております。

また、2022年には広島県支部における青少年赤十字100周年特別事業によるネパール赤十字社との交流をきっかけに、2023年11月には、日本赤十字社主催の国際交流事業で来日した、ネパールの高校生3名が広島県を訪れました。滞在中は、平和記念資料館や慰霊碑の見学などの平和学習や青少年赤十字加盟高等学校の生徒との交流、ホームステイなどの様々な経験を通して広島県の歴史や産業、

文化について学んでいただきました。このような多国間の生徒同士の交流は、青少年赤十字活動により結ばれた縁であると感じるとともに、この縁を今後も大切にしたいと感じているところでございます。

世界的には多くの危機が絶え間なく発生している状況ではございますが、そのような時こそ、日常生活が当たり前でないことに気づき、青少年赤十字の活動を通して、人の苦しみや痛みを「気づき」、同じ人間としてどうすればよいかを「考え」、自分ができることを、勇気をもって行動する「実行の人」として、是非とも成長してほしいと願っております。

広島県支部としても、賛助奉仕団の皆様と密接に連携を取り、青少年の育成に取り組んでまいります。今後とも、青少年赤十字活動のさらなる飛躍に向け、皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

青少年赤十字の一層の発展を願って

広島県青少年赤十字賛助奉仕団

委員長 山中 章敬



私たちは青少年赤十字賛助奉仕団は、青少年赤十字の指導者をしていただく先生方が中心となって活動しています。主な目的は、青少年赤十字の普及と発展・加盟促進です。また、赤十字思想に関する専門知識の研修や普及活動に努めています。この趣

旨に賛同される方なら、どなたでも賛助奉仕団で活動できます。

本県の賛助奉仕団は、昨年度から防災教育推進のため教材づくりに力を入れています。広島県が土砂災害をはじめとして自然災害による被害リスクが全国で最も多いことなどから、防災教育の教材づくりを進めることにしました。赤十字社が東日本大震災後に作成した教材「まもるいのちひろめるぼうさい」の活用を推進しつつ、広島県に特化した防災教材の開発を進めています。

青少年赤十字加盟校は、態度目標「気づき、考え、実行する」のもとで各校特色のある活動を行っています。赤十字の精神に基づく人道的価値観を持ち、思いやりがあり、実行力のある子どもたちを育てることを目指しています。

昨年度は、青少年赤十字創設百周年記念行事として、広島県では「百万羽おりづるプロジェクト」がコロナ禍で制約のある中で進められました。県内の幼稚園から高校までの多くの加盟校が、青少年赤十字としての思いや平和の願いを発信し、新たな百年への出発点となりました。そして、青少年赤十字の活動も徐々にではありますが着実にコロナ以前の状態に戻りつつあります。地道で、それぞれの学校で特色のある活動が行われるようになっていきます。

一方で、コロナ禍での活動停止の期間が長かったため、青少年赤十字の活動が途切れ、さらに担当者の転勤なども重なり、活動が少し難しくなったところもあります。青少年赤十字の良さを理解していただき、より豊かで思いやりがあり、活力ある教育を

すすめられることを願っています。賛助奉仕団は、青少年赤十字の活動がより活発になるための支援や協力をしたいと考えています。

本県賛助奉仕団は、柔軟で創意に富んだアプローチを用い、青少年赤十字の活動をサポートする方法を模索していこうと思います。将来的には、防災教育の推進に加え、国際人道法の普及活動やSDGsの取り組みなど、赤十字に関係する教材開発などをして青少年赤十字の支援活動を行ないたいと考えています。皆さんとともに活動し、未来を切り開いていこうと思っています。ご参加ご協力をよろしくお願ひいたします。

(実践報告)

指導者研修に参加して「幼稚園で育てたい力」

学校法人田口学園 ちどり幼稚園

教諭 天満 満里奈

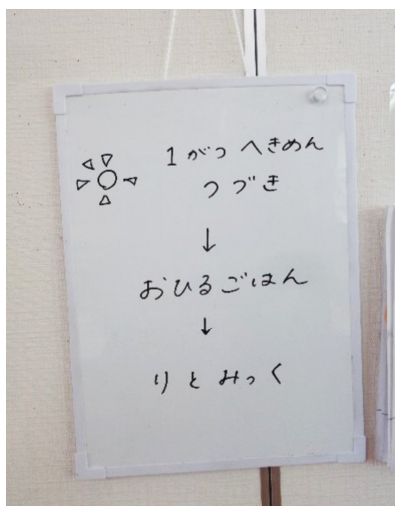


耳にしたことがあってもあまり知ることのなかった赤十字の精神、活動を知るきっかけとなる、青少年赤十字指導

者研修会に参加をしました。ここでは赤十字の精神に基づいた研修計画の中で1日を過ごすことで自身が研修を受ける前との変化を感じることができました。指示のない生活の中でどれだけ自分が自分で判断し行動に移すことができるのか、集団の中で

言葉や行動で積極的に表現ができるのか、自分にチャレンジをすることができなのか、先生という立場ではなく子どもの目線になり体験することによっていつもとは違う自分になったと思います。

「指示のない生活」の中では実際にチャイムや放送のない中で進んで掲示板を見たり、周りの人に声をかけたりし情報を収集するなどして自分の行動を進めていくことが必要でした。この繰り返しで自然と自主的な行動を起こせるようになっていきました。「自分の考えをもつ」生活ではプログラムをしていく中で個々の相互理解を深めていくためには自分の思いをしつかりと口にして伝えていくことが必要であることを身をもって経験しました。「積極的にチャレンジをする」ことも実行する力であり、自分が気づいたことや考えていることを行動に移すことで他のために自分を生かすことができるように感じました。



きょうのよてい

自分で進んで行動し気づけることがあった経験や自分から積極的に発言をする機会があり仲間との交流の深まった経験などを通してクラスの子どもたち

には指示待ちではなく先を見通し、自分の思いを前に出していく自主的で自立した子どもを育てていきたいと思うようになりました。

そうした思いからクラスの中に1日の活動をホワイトボードに掲示することにしました。子ども目につきやすいところにイラストや文字で描いて置いています。

前日に明日の予定を伝えながらホワイトボードに書いていくことで、先を見通すことができ安心をする子どもが増えたのか次の日を楽しみに降園をする子どもが増えました。これまで行動をするまでに時間がかかっていた子どもも掲示を見て、行動をする様子が見られたり、子どもたち同士で「この次〇〇があるね!」などの会話があたりと先のことを見通し考え動く力がついてきているように感じます。また保育者とはなく子ども同士の会話がが増え、わかっている(気が付いている)子が困っている子にも積極的に声を掛け関わりが深まっている様子が見られます。たつたひとつの掲示板でしたが、子どもたち同士のかかわりの変化、気持ちの変化が感じられ、いい取り組みになっているように思います。

また自分の考え思いを口にし、集団の中での相互理解を図っていくために一人一人が自由に発言ができる時間を毎日の中に少しだけ設けることにしました。発言している子は他の子どもへの反応を見て嬉しそうに頷くなど自分の表現が受け止めてもらえていることへの喜びを感じています。こうした経験を積んでいき、自分の言葉や行動に自信をもって積極的に表現をすることができるようになってくれると

嬉しいですよ。

今後も青少年赤十字の態度目標である「気づき考え実行する」の力を育む活動を積極的におこなっていききたいと思います。

(実践報告)

赤十字との出会いと新たな学び

東広島市立龍王小学校

校長

土肥

美由紀



本校は、創立6周年を迎え今年度初めての卒業生を送り出しました。JR「寺家駅」に近く、児童数が1000人を超え、東広島市では最も大きな小学校です。

令和4年度の春、コロナ禍から日常生活が少しずつ戻りかけていた矢先、本校と日本赤十字社広島県支部（以下、「広島県支部」と）との出会いがあった。

本校では「夢と志をもち、未来を切り拓く子供の育成」を教育目標としているが、その基盤として「自ら学ぶ子ども」と「思いやりのある子ども」の育成を目指している。そのことが、赤十字の基本原則である「人道の精神」と青少年赤十字の態度目標である「気づき・考え・実行する」と重なり、加盟校となることを決めた。

そして、折しも加盟1年目には、青少年赤十字の創設100周年を記念して「100万羽おりづるプ

ロジェクト」が特別事業として実施された。本校でも、例年夏休み前に子ども達が鶴を折り、「平和学習バス」に参加した児童会代表者が平和公園に持っていく活動を続けていたため、この特別事業にも参加することにした。

広島県内の青少年赤十字加盟校の子ども達が心を込めて制作した120万羽を超える折鶴が世界最長のギネス記録に認定され、その後ノートに形を変えてネパールに届けられるという、本事業の壮大な夢の実現は、本校の子ども達の心を大きく育てることとなった。

そして、加盟2年目である今年度は、本校の平和学習を広島県支部の職員の方と共に創っていくことができた。5月には広島G7サミットが開催され、平和を望む声が世界的に高まっていた時期と重なり、この取組も本校にとって大きな出来事となった。昨年度までは地域の方から戦争中の暮らしについての語りを聞く会を実施していたが、コロナ禍の期間にその取り組みが途切れてしまっていたことや講師の方の年々の高齢化に伴い、持続させることが課題となっていた。

そこで今年度は、日赤広島県支部が参加校に貸し出しを行っているアニメ「ジュノー」の内容を取り上げることを通して、平和について考えることを企画した。本校の平和学習担当者とは広島県支部の職員の方との連携を何度も行い、8月6日の「平和学習の日」本番を迎えた。日赤県支部の職員の方が、ご自分でも実際に平和公園を訪れ、作ってくださった資料とその解説は、非常に分かりやすく、本校の教

職員や児童にも大好評だった。



講義中の日赤県支部職員

その際、戦争に至った経緯やこの時代の暮らし等の重要な歴史的背景を解説してもらいながら動画を効果的に活用するよう工夫した。



校内オンラインシステムにより全35クラス、1,100名の児童にオンライン講義を実施

広島県の地におけるマルセル・ジュノー博士の素晴らしい活動を改めて学ぶことができ、「人の命を尊重し、苦しみの中にいる者は、敵味方の区別なく救う」という赤十字の祖であるアンリー・デュナンの

「浮いて待つ」という合言葉を胸に、自分の周りの人の命を守る行動を、体験学習を通して学んだことも、大きな成果だった。



ペットボトルなど身近にある物で浮く体験をする6年生

9月のプール納めには、日赤県支部から講師を迎え、6年生が「着衣泳」を実施した。



「平和学習の振り返り」に取り組む児童たち

提言とともに児童の心に印象深く残った。

授業の振り返り

して参加した。今年度は県内の6つの中学校から19名の生徒が参加した。



中学校トレーニング・センター（トレセン）（報告）
広島市立宇品中学校 上岡 繁生

令和5年8月17日（木）・18日（金）の2日間、日本赤十字社広島県支部で行われた広島県中学校青少年赤十字トレセンにスタッフと

青少年赤十字への加盟により、これまでの学校行事や学習に、新たな視点を与えていただいたこの2年間は、子ども達の心を育てる価値ある日々となり、心から感謝している。



合い言葉は「浮いて、待つ」みんな大変上手にできました！

参加者は最初緊張した面持ちだった、講義の中のグループワークやホームルームなどを通して、それ



グループ発表

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために2年間中止していたが、昨年度から日帰りの2日間で行っている。コロナ前は2泊3日で行っていたので、研修時間が少なくなった。そのため当然のことながら、内容を減らすことになる。必要性和時間配分を考えてより良い形を模索しながらの実施となった。例えば、「赤十字と青少年赤十字」の内容をホームルームで確認したり、別の講義の中での振り返りや、フィールドワークの中で再度取り組むなどして定着を図るようにした。

それぞれの力を表に出せるようになってくる様子が見えた。特に、2日目のフィールドワークの中でホームルームごとに課題に取り組む姿勢や表情は素晴らしく、スタッフにとってもやりがいのある楽しみの一つでもある。生徒たちがこの2日間で、参加して良かった、学校生活に役に立ったと思ってもらえていればいいなと思っている。



救急法

中学校では、行事をコロナが明けてもコロナ前とは形や内容を変えたり、縮小したりするなど変化してきている。単に時間がないために省いたというところもあるかもしれないが、時代の流れや昨今の教員の働き方改革などの影響も考えられる。

令和6年度の中学校トレセンは2泊3日のトレセンを計画している。内容の精選やスタッフの人数の確保など課題がある中で、生徒に力を付けさせることと継続が可能な方法を今後も探していかなければならない。

令和5年度第5ブロック青年赤十字奉仕団連絡協議会（報告）

植田 健太郎



令和5年9月22日～23

日の1泊2日を利用して
第5ブロック（中国・四

（国）青年赤十字奉仕団連

絡協議会研修会を実施し

ました。9年前は季節外れの台風接近のため中止となってしまうため、18年ぶりの広島県での研修会開催となりました。

まずは研修テーマ決めから難航しました。青少年赤十字のトレセンで行う赤十字精神を取り上げるのか、グループワークを行って活動を考えていくものか、いいのか等々、考えました。そのような中で、県支部職員さんからアドバイスを頂き、「献血もしくは平和ではどうか」と仰っていただきました。献血としては「広島県には中四国ブロック血液センターがあり、献血推進活動を全国的に行っているのでテーマとして良いのではないか」とのことでした。平和

に関しては、「昨今の世界情勢から平和を改めて考えることや原爆ドーム・資料館の見学も良いのではないか」ともアドバイスを頂きました。最終的には「広島県だからできる研修」との事で平和について考える研修をテーマに据えました。

第1日 講義1は、支部指導講師であり日本赤十字社看護師同方会広島県支部長の阿部直美様に「原爆と赤十字」と題してお話いただきました。



講義 1 「原爆と赤十字」

阿部直美 日本赤十字社看護師同方会広島県支部長

講義2は、「国際人道法」を支部調整監の脇谷孔一様にお話いただきました。現在、ウクライナ・ロシアの戦争が継続しており、赤十字が大変大きな役割を担っていることを実感しました。どちらの講義も参加者にとっては初めて聞く内容で、大変感銘を受けました。



広島赤十字原爆病院メモリアルパーク

講演を元に、広島赤十字原爆病院メモリアルパーク、原爆資料館や記念碑などを見学しました。



講義2「国際人道法」

脇谷孔一 広島県支部調整監

他県参加者から、「戦争は国内でさまざまな惨禍もたらしたにもかかわらず、その惨劇の姿は跡形もない状態です。しかし、広島では現在も将来にわたって残していく努力が続けられている」ことを実感したとの声がありました。



グループワーク

そして、講義で学んだことや見学で得たことをもとに「平和と人道」についてグループワークを行いました。特に、注意したのは日頃のボランティア活動がマンネリ化し、活動そのものに目的化されてしまっていることです。人道の観点があれば、各地の災害や紛争などにも対応できるのではないか、などの声が出山出てきました。それらをグループでまとめ発表し合いました。

2日目は、「自分たち自身で人道の達成に向けて」

と題して、各自のフィールドに帰ってから何をなすべきかをワークショップ形式で行動計画を一人ひとりが考えました。

2日間の研修を通して、「平和とは何か」「人道とは何か」と自分自身に問いかける契機になりました。また、赤十字の基本原則にある「人道」について改めて考えるきっかけになりました。まだ決して平和な世界とは言えない情勢ではありますが、世界が平和になるには自分がどのような行動を取ればいいのか、これからも考えていきたいと思います。

末筆になりましたが、今回の研修会に参加して下さったブロック・県内の赤十字奉仕団員の皆様、常に的確なアドバイスを下さった日本赤十字社広島県支部の皆様、研修会スタッフの皆様、素晴らしい講演をして下さった阿部直美様、脇谷孔一様、他本研修にかかわってくださったすべての関係の皆様にお礼申し上げます。



幹事長 寺田 宣文

令和5年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会（報告）

10月26日（木）・27日（金）

に、令和5年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会が愛媛県松山市で開催され、中四国

9県から青少年赤十字賛助奉仕団の方々が集いました。

この愛媛大会は、3年ぶりの去年の広島大会を受けての開催で、各県から賛助奉仕団員が29名集まりました。広島県からは4名の団員が参加しました。愛媛県賛助奉仕団や支部のみなさんにはお世話になりましたが、完全復活した感がありました。2日間を通じて、赤十字思想である「人道・博愛」を強く印象付ける内容でした。



令和5年度参加者

第1日 第1部 記念講演

「正岡子規の最期」〜深い愛に包まれて〜

松山市立子規記念博物館総館長 竹田美喜

結核菌により、寝たきりで半身不随に至る難病に冒されながらも子規は口述筆記を使い、最後まで意欲的に文筆作業を続けました。感傷的な文章を一切

書かなかった子規の創作意欲は、見事というほかありません。子規は根岸にある終の棲家「子規庵」で、母の八重、妹の律に看病されていました。彼を支えたのは、肉親だけではありませんでした。そんな彼を、親友の夏目漱石や高浜虚子、伊藤左千夫ら文学者仲間が献身的に支えました。なんと「看護順番表」まで作って子規のそばで支えました。

「病床には病床の樂事あり」「病人には病人の趣向あり」

彼を支えた多くの文人仲間たちの残した記録文だけでなく、子規が、母や妹、文人仲間へ感謝と気遣い（時には逆に励ましの言葉）に満ちた返書や言葉を多く残していることを紹介してくださいました。正岡子規の最期を中心にお話しされたにもかかわらず、講話を聴いた私たちがとても満たされた気持ちになりました。

第2部 各県の取組についての発表と意見交換

「各県の取組についての発表と意見交換」では、各県の特徴ある活動または課題についての熱心に協議が行われました。

JRC活動を活発化する方法として、トレーニングセンターや学校訪問に参加して、賛助奉仕団員の経験を先輩の先生や子どもたちに積極的に語りかけること、自らの実践あるのみであること、取組むべき課題は数多くありますが、団員自らの積極性にかかっていることを強く感じた協議会でした。

第2日 「視察研修」

松山市立潮見小学校を訪問しました。この学校には「目の見えない犬ダン」（大西伝一郎著）で知ら

れるダンの像が校庭にあります。そのダンの像のすぐそばに校舎の屋上まで成長した「いとすぎ」が見事です。この「いとすぎ」は、愛媛県青少年赤十字奉仕団によって、上記の作品を参考にして作られた資料「目の見えない犬を助けた物語」や紙芝居「えひめいとすぎ物語」などで紹介されています。実際に、20メートルを超えるいとすぎを下から見上げてみると、とても圧倒される大きさ、雄大さと歴史を感じました。



立派に育った「いとすぎ」

次に向かったのは、「ロシア兵等墓地」です。日露戦争時、松山に、わが国ではじめてロシア人捕虜が連れてこられることになり、おびえていた捕虜たちに対し、港には多くの民衆が出迎えました。傷病兵に対しては赤十字の看護婦が献身的な介護をほどこしたそうです。捕虜には外出も許されており、彼らは商店で買い物をしたり、自転車で海まで遠出したり、道後温泉で憩うなど、比較的自由で平和な日々を過ごすことができました。将校の中には故国から家族を呼び寄せる者、日本女性と結婚したいと申し

出る捕虜も現れました。彼らの捕虜生活は、ほぼ2年にわたり、その数も6千名に及びました。（当時松山の人口は3万6千人）そして、本来は敵味方であるはずの市民と捕虜の間に、そのような長い期間何らの不祥事も起こっていないという事実、私は驚かざるをえません。



ロシア兵墓地

帰国を果たせず松山で亡くなった捕虜は98名を数えます。松山の人々はこれを悼み、終戦の翌年から墓地の整備に取りかかり、昭和35年に移転・改修され、今日に至り、墓地の清掃は今日までとぎれることなく続けられています。

この2日間の研修交流会をとおして、青少年赤十字賛助奉仕団の活動の重要性や在り方等を改めて認

識する機会となりました。

「広島県版、防災教材作成プロジェクト」について

顧問 日高 敬司



広島県では、過去に大雨や台風などがたびたび襲い、土砂災害が繰り返されてきました。最近では異常気象も相まって、大きな被害と多くの犠牲者が出ています。特に、広島県内の土砂災害警戒区域が全国一であることが最近になって一般的に認識されました。



平成26年広島市安佐南区土砂災害
(広島県みんなで減災推進課提供)

そのような中で、このプロジェクトを立ち上げましたが、企画趣旨については、既に報告しているとおりです。

作成に当たっては、国土交通省中国地方整備局、広島県みんなで減災推進課・砂防課、広島气象台、県教育委員会、NHK広島放送局、日本赤十字社広島県支部など連携し、各機関とも手持ちの資料の提供やその後の指導、ホームページ（HP）の引用などの快諾を得ました。

今年度は2年計画の最終年度で、一定のめどが立ち、第1回目の協力者会議を開催しました。これをもとに、関係機関、そして協力者や学校現場の先生方によって、最終校正を進めているところです。

この教材は印刷物ではなく、HPを作成しアクセスして利用することといたしました。その主な理由は、①現在小学校から高校まで児童・生徒にパソコンが配布され日常的に活用しているため、ネット利用がもはや困難なものでなくなっている、②印刷物より、イラスト、写真、動画などを大いに利用できる、③興味関心を引きつけることができる、④視聴覚教材であるため、分かりやすく体感的に理解できる、④シミュレーションなど利用方法の幅を拡げることができる、⑤情報は不易と流行があるが、流行の部分についてHRを更新することによって最新の情報を提供できる、⑥印刷費の負担をなくすことができる、などです。

ここで、大まかな概要を述べます。構成は4部になっており、1部は理論編、2部は実践編、3部は指導案編、第3部は資料となっています。

第1部の理論編について。特に広島県の災害の歴史や地理的状况を学習者が調べ学習できるように工夫しました。現在完成しているのは、中学・高校生

用で用語が難しい点がありますので、小学生用を開発する予定です。

第2部の実践編について。教師の指導のもとでグループワークやシミュレーションができるようになっています。例えば、シミュレーションでいうと、現在地で洪水や津波が襲った場合どのようなことになるかなどタブレットで観察できる（AR映像）、仮想空間で土砂災害が起こったときを再現できる（VR映像）などです。また、地図上で避難経路グループで考える（DIG）などがあります。

第3部の指導案編について。これは先生方が理論編・実践編などを利用して防災教育を行うためのモデル指導案をいくつか用意しました。そして、この欄は本HMの利用にかかわらず、学校で防災教育を実施された先生方の指導案を提供いただき、掲載しようと考えています。そのことにより、広島県の防災教育が一層発展することを望んでいます。

第4部資料編について。1つ目は、全国の防災に関するHPのURL（ネット上の住所録のようなもの）を収集し掲載していますので、より詳しく調べ学習ができます。2つ目は、授業やパソコン利用に役立つソフトやなどを紹介しています。

近日中にHPを開発する予定です。URLは、日赤広島県支部（<https://www.jrc.or.jp/chapter/hiroshima>）、広島県青少年赤十字賛助奉仕団（<https://www.hiroshima-jrcvc>）からアクセスできますので、感想や意見などがありましたらお寄せください。

JRCに出会い50年を越えました

（その三）

副委員長 野田 崇



1996年9月、広島県支部から、「3月末に実施される全国高校スタディーセンター（スタセン）の指導スタッフに推薦

したところ、決まりました」と連絡がありました。以前から、スタセンに関心があつて機会があれば参加してみたいと思っていましたので、校長の了解を得て参加の承諾をしました。

12月初旬、東京の日赤本社で参加スタッフと日赤本社青少年赤十字課職員の打ち合わせが行われました。全国から集まった初対面の皆さんなのに、初めから忌憚のない意見交換になり、スタセンの目的の確認やプログラムの分担、スタセン生活支援の役割の確認等を決めました。

わたしの担当プログラムは、開講式後の「オリエンテーション」になりました。広島県の高校トレーニングセンター（トレセン）のオリエンテーションを基本に「プログラムには、ねらいと仕掛けがあること」を盛り込んだオリエンテーションにすることにしました。

1997年3月24日午後、スタセンの行われる東山荘（静岡県御殿場市東山）に到着して、スタッフと最終打ち合わせを行い、プレゼンは前述の「ねらいと仕掛け」の了解を得て、さらに「一日の最後のHRでそのことを解説する」を確認しました。

25日午後、47都道府県から、100名弱の参加者が続々と東山荘につきました。各県でトレセンを終了していますから、指示なし受付も戸惑いもなくスムーズに到着手続きをしました。様子を見てみると、期待にワクワクしながら参加者同士お国なまりを交えて交流していました。



全体討議

14時からHR（？）に着席し開講式が「空は世界に」から始まります。本社青少年赤十字課長挨拶・スタッフの自己紹介と続き、担当のオリエンテーションになります。

5泊6日のスタセンの生活について約束ごとについてオリエンテーションした最後に「スタセンのプ

プログラムには仕掛けとねらいがあり、気づくことでスタセンの5泊6日が充実する」と、鼓舞しました。



グループワーク

5泊6日プログラムはトレセンと大きくは変わりませんが、全国から集まった仲間により「気づき、考える」の視点に多様性があり、発言や行動に深まりがあることを毎年実感しました。このことをHRで話し合ううちに、各々が自分の内面と自己葛藤を始めます。毎日のプログラムの中で、グループワークや仲間意識が強まり、自分の懊悩を吐露する生徒が出てきます。それをみんなで受け止め、話し合う

ことによって仲間意識が化学反応を起こして、スタセンがより深まっていきました。

フィードバックは、12月のスタッフ会議で広島県トレセンでは、野外に出て地域の現状と課題を調査してまとめをグループワークしていると、報告したところ取り入れられ、山中湖村をフィールドワークしてグループでまとめるプログラムになりました。

ワークショップは、5日目の午後から始まります。地元に戻って取り組む課題を解決する内容になります。5W1Hで書き始めますが、取り組む課題に対して、「Why?」を何度も投げかけ課題解決に取り組む意欲の深まりを確認します。毎回、夜遅くまで格闘する生徒がいました。

13年間11回のスタセンでは、なぜかいつもオリエンテーションを担当しました。経験年数の多さからか、いつの間にかコアスタッフになっていました。スタセンのスタッフとして学んだことは、「生徒理解はトコトン待つこと、トコトン話し合うこと」でした。

2011年3月11日東日本大震災、13年にわたるスタセンで出会った参加者が被災地域に約30名いました。11日から安否確認の電話をしました。1週間後に、陸前高田市からの参加者から「わたしは下宿探して進学予定先の仙台で被災したが無事」のメールで全員の無事を確認できました。(つづく)

令和5年度青少年赤十字賛助奉仕団活動報告

幹事長 寺田 宣文

4月3日(月) 日赤広島県支部(県支部)

第1回役員会

4月21日(金) 県支部

青少年赤十字指導者協議会総会・研修会

4月22日(土) 県支部

機関紙「賛助ひろしま28号」発送作業

令和5年度賛助奉仕団総会

5月23日(火) 県支部

賛助奉仕団会議

6月15日(木) 県支部

賛助奉仕団会議

7月1日(土) 県支部

青少年赤十字指導者研修会

指導者トレセン(スタッフ参加)

7月4日(火) 広島気象台

防災教材づくりの協力及び資料依頼

7月11・12日(火・木) 日赤本社(東京)

全国賛助奉仕団協議会総会(委員長出席)

8月3日(木) 県支部

小学校トレセン

8月17・18日(木・金) 県支部

中学校トレセン(スタッフ参加)

8月16・17日(火・水) 広島県情報プラザ

高校トレセン(スタッフ参加)

9月26日(火) 県支部

防災教材作成会議

10月17日（火）

県支部

教材作成会議

10月26・27日（木・金）

愛媛県松山市

中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団

連絡協議会・研修会

10月29日（日）

国泰寺中学校

青少年赤十字広島県大会・

①参加者、学校関係者、地域奉仕団、特殊奉仕、

賛助奉仕団員

②午前の部（全体会）、永年表彰、学校別発表

③午後の部（校種別に分科会）

特に高校の部では、例年救急法競技会を実施しています。競技会は3人一組で、心肺蘇生法、AED、包帯法の3種類。校内で習熟するまで練習をしているため、いざという救急現場で活躍することでしょう。これは全国でも余りない取り組みです。

第1回機関紙編集会議

11月21日（火）

県支部

防災教材作成会議

12月20日（水）

県支部

防災教材作成会議

12月25日（月）

県支部

防災教材作成協力者会議

2月27日（火）

県支部

第2回機関紙編集会議

3月19日（火）

県支部

第3回機関紙編集会議

3月29日（金）

第4回機関紙編集会議

県支部

◎登録式出席

4月11日（火）

海田町立海田西中学校

4月12日（水）

海田町立海田中学校

4月20日（木）

府中町立府中中学校

6月6日（火）

広島市立湯来小学校

令和4年度青少年赤十字加盟状況

（加盟校数・加盟率）

校種	全国		広島県	
	加盟校数	加盟率	加盟校数	加盟率
幼稚園	616		6	
保育園	635		21	
認定こども園	529		3	
小学校	7,173	37.1%	101	21.4%
中学校	3,555	34.7%	80	29.6%
高等学校	1,775	36.4%	40	31.0%
特別支援学校	210	17.9%	4	22.2%
合計	12,713	36.1%	225	25.7%

（加盟校数は、本社「令和4年度青少年赤十字概況」から掲載）

令和5年度 青少年赤十字賛助奉仕団 役員

委員長

山中章敬

副委員長

野田 崇、寺田宣文

（兼）幹事長

寺田宣文

会計幹事

下野玲子

幹事

河野和夫、原田樹雄

監事

采谷宣子、吉丸朝美

顧問

河戸靖子、光本凉子

田中 博、日高敬司

平越幸男、水野善親

編集後記

コロナ禍の3年間は世の中の活動が停滞した時期でありました。それは県内の教育活動においても見られることで、青少年赤十字活動も同様でした。青少年赤十字育成の中心となるトレセンは、中止や泊なし2日といった状態でしたが、来年度からは二泊三日となり、活動が回復してまいります。そのような中にあって防災教育教材が完成をみることにになりました。これを学校で使っていただき、ご意見を頂きながら更なる改善に取り組みたいと思います。今後、活動が活発化していくよう賛助団としても応援していきたいと考えています。

編集委員

下野玲子、寺田宣文、野田 崇、日高敬司、
山中章敬